

河川への愛着を育む「白川夜市」の取り組み

増山 晃太 風景工房 代表／熊本大学 くまもと水循環・減災研究教育センター 研究員

1. 白川「緑の区間」の整備と利活用

熊本市内中心部を流れる白川の大甲橋から明午橋の区間は「緑の区間」と呼ばれ、兩岸に茂る豊かな緑は“森の都・熊本”を代表する景観として、市民に愛されてきた。この区間は川幅が狭く治水上のボトルネックとなっていたため、1986年に大規模な掘削と堤防整備による改修計画が発表されたが、景観を守りたい市民との間で対立し、長年改修に着手できずにいた。1997年の河川法改正なども経て見直された計画では、右岸はできるだけ既存樹木を残したうえで堤防を整備し、左岸は掘削・堤防整備とともに主要な樹木を後背地に移植することで、ようやく治水と景観の両立を図る整備の検討が進められることとなった。景観検討には2003年から熊本大学景観デザイン研究室も参加し、2015年4月に暫定供用が開始、現在は一部の工事を残すのみとなっている。景観検討では利活用を促すようなデザインも行っており、当時一緒に議論をしていた国土交通省の担当職員らが中心となって、暫定供用時に川沿いでオープンカフェやマルシェなどを行う「ミズベリング白川74」を開催し、新たな水辺の利活用の形が見えてきていた。

2. 「ミズベリング白川74」から「白川夜市」へ

国土交通省が事務局となり中心商店街や自治会代表で構成する「白川『緑の区間』の利用を考える協議会」が設立され、ミズベリング白川74を契機として利活用の促進を目指していたが、その後は年一回程度の社会実験の開催にとどまっていた。大甲橋下流の九品寺地区でクラフトビールのバーを運営するジェイソン・モーガン氏はミズベリング白川74にも出店しており、緑の区間の利活用の可能性を感じていた。地元の経営者などのメンバーを募り利活用の主体となる「Shirakawa Banks」という任意団体を2018年4月に立ち上げ、九品寺地区で以前行われていた夜市を復活させるという形で6月と9月に「白川夜市」を開催し、2019年には3月から11月まで毎月第4土曜（16時から22時）の定期開催が実現した。3月には17店であった出店者が最大37店となり、毎回1,000人以上の来場があるイベントとなっていく。Shirakawa Banksは「楽しさで人をつなぐ。」をコンセプトに、産学官でコミュニティづくり強化に貢献するボランティア活動と、地域活性化・地産地消を推進する営利目的の活動で、補助金に頼らないまちづくり団体を目指しており、夜市開催前には緑の区間の草刈りを行うなど、河川の管理を含めた公民連携のあり方も模索している。

3. コロナ禍での「白川夜市」の開催

2020年は新型コロナウイルスの影響を受け、熊本市内でもほとんどの催事が中止となった。このような中でも、緊急事態宣言解除後にはShirakawa Banksメンバーだけでなく出店者とともに草刈りを行うなど、できる限りの活動を続けていた。その後、感染症対策に係るリスクレベルに応じてテイクアウト形式とするなどのルールを作成し、9月から11月まで3回の開催にこぎつけることができた。以前のにぎわいから様変わりはしたが、市内中心部から対岸の屋外空間であり、川沿いでは社会的距離を取る工夫を行うなど、比較的対策を講じやすい場所であったことも、コロナ禍での開催ができた要因だといえる。開催前には出店者や来場者の減少など多くの不安があったが、実際には白川夜市の開催を待たれていた方も多く、地域に定着してきていることを実感できる成果であった。

利活用を想定した河川整備を行うことに加えて、市民が日常的に利用し、地域が積極的に活用していくことで河川への愛着が生まれ、ひいては防災意識の向上へとつながっていくものとする。そのきっかけを作り出す取り組みとして、既に欠かせない役割を担っているのだとあらためて感じた、コロナ禍での白川夜市開催であったように思う。



地域に定着してきている「白川夜市」（2019年）



幕を使った川沿いの社会的距離を取る工夫（2020年）